

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 28 日現在

機関番号：32506

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2013～2015

課題番号：25580092

研究課題名(和文)文末に起こる現象：コピュラの再考

研究課題名(英文)Rethinking "copulas" in sentence-final positions

研究代表者

大野 仁美 (ONO, HITOMI)

麗澤大学・外国語学部・教授

研究者番号：70245273

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：グイ語(コエ語族)における「'a」と日本語における「ダ」は、ともにコピュラと称され、  
ていながら、常に2つのNPの存在を必要とするわけではないという現象を共有している。本研究は、これらを同定詞(  
NPは1つで良い)と考え、テキストをもちいてそれらのふるまいを観察・分析し、これらを文法的・語用論的に対照し  
た上で、これらが文外の情報との関連をどのようにしめすかを考察した。

研究成果の概要(英文)：This study has investigated the behaviors of the copula-like morphemes, "'a" in  
G|ui (a Khoe family) and "da" in Japanese, with text-level data, redefining them as identifiers which  
require only one NP not as copulas which copulate two NPs, in order to find what grammatical and  
pragmatic phenomena are shared between them, and shown how they link information outside the sentences  
they are put in to them.

研究分野：言語学

キーワード：談話 コピュラ 文末 情報構造

## 1. 研究開始当初の背景

コイサン諸語・コエ語族群において文末に用いられる小詞「'a」は、コンピュータと解釈されてきたが、それ以外にも topic marker や accusative marker としての機能ももつ、多機能な、あるいはその本質がうまくとらえきれない要素として扱われてきた。コンピュータと解釈されるとしても、「NP1=NP2」という文において必須の要素ではないことと、「'a」が用いられる際に NP は必ずしも2つあるわけではないこと、という、定義上純然たるコンピュータであることを否定する現象も同時に観察されてきた。

この2つの現象は、日本語においてコンピュータと称されることの多い「ダ」(および「デス」「デアル」などその相当語句)にも指摘されてきたことである。また、「'a」の実際の談話での用いられ方を分析するうち、そのもつ機能の一つとして、それが生起する文を超えたところにある別の「情報」と「関連させる」はたらきをもっていることに気がついたが、これもまた日本語の「ダ」あるいは「ノダ」においてみられる現象である。

類似現象が他言語においてもみられることを踏まえ、類型論的な観点を持ちつつ、これらの現象について分析し、両者の共通点と相違点を把握したのち、それぞれが談話構成上のどのような機能と有機的につながっているのかを明らかにすることによって、文末という位置の特殊性の理解を談話との関わりにおいてすすめることができるのではないかと考えた。

## 2. 研究の目的

この研究の目的は、文末に生起しコンピュータと解釈されてきたコエ語の小詞「'a」と日本語の「ダ」が、どのような場合に必須で、どのような談話的機能を持つかを明らかにすること、それをもとに、系統的・地理的にかき離れた存在である日本語とコエ語族においてこのように似た現象が見られることにに関して、生起位置が文末であることに注目し、それがどのような類型論的特徴と体系的に関わっているのか、あるいはないのかを考察することである。

## 3. 研究の方法

### (1) 調査項目の設定

日本語「ダ」(およびその相当語句)とコエ語「'a」に関して、以下の項目を明らかにし、両者の共通点・相違点を明らかにする。

NP は幾つ必要か、1つの場合、省略されていると考えられる NP はあるか。

declarative sentence marker と考えられるか、埋め込み可能か。

生起する文中でなんらかの要素が dislocate されているか。

accusative particle と考えられるか(グイのみ)。

話者の認識を表すと考えられるのはどの

ような文脈においてか。

文を超えて外にある情報とのリンクを示すのはどのような文脈においてか。

### (2) 調査関連項目と使用する資料

「現代日本語 (= 現在標準とされる日本語)」は、書記言語としてあるいは公の場で正式な体系として最も頻繁に用いられる変種であり、その性質上、設定された文法的な正しさを満たし、丁寧な文体を選んで使われることが多い。それはより頻繁な「ダ」(あるいは「デス」)の使用となって現れていると考えられ、本来日本語として最低限必要な場所以外のところにも「ダ」が用いられている可能性がある。これらの困難から逃れるため、方言で、なるべくくだけた親しいスタイルでの談話資料を用い(収集し)分析を開始する。この目的のために、二次資料も手に入りやすい関西方言(主に南紀方言)をもつばら談話分析対象とする。

同様に、グイ語においても主に談話資料をもちいて分析する。グイ語における小詞「'a」の歴史の変遷を考察するために、同じくコエ語族に属す言語のうちグイ語と同じ下位グループに所属するツェラ語の調査も実施する。

調査の経過にともなって、「(ノ)ダ」およびその相当形式と「タ」形の共起(「ダ」に後続する場合も、「ダ」が接続する節内にある場合も)を、同様に、グイ語のコンピュータ文を分析する際にも時制を分析対象要素とすることが必要になった。そのため、(グイ語において時制は文末に生起する現象ではないが)両言語において時制を考察対象に追加した。

## 4. 研究成果

### (1) 当初の課題

まず、当初調査対象とした以下の6点についての回答は以下の通りであった。

NP は幾つ必要か、1つの場合、省略されていると考えられる NP はあるか。  
・両言語ともに、2つの NP は必須ではない。いずれも単独の名詞節(文が名詞化したものも含む)に後続することができる。その場合、省略されていて、復元可能な NP は想定できることもできないこともある。したがって、1つの NP と共に用いられる同定詞(identifier)と考えるべきである。

declarative sentence marker と考えられるか、埋め込み可能か：

・両言語ともにこれらは否定文で用いられるので、declarative sentence marker ではない。ただし、「ダ」相当語句である「ヤ」は、南紀方言において、否定文マーカ-および疑問文マーカ-と対立する。

・埋め込み(補文内での使用)は可能。しかしグイ語での「'a」の文末以外の位置での

生起数は少なく、生産的ではない。生起条件はまだ明らかにできていない。

生起する文中でなんらかの要素が dislocate されているか。

- ・ dislocation は必須ではない。しかし、グイ語の「'a」の出現は要素の dislocation との共起が多い。

accusative particle と考えられるか (グイのみ)。

- ・ グイ語では (現在の使用からは) 考えられないが、ツェラ語では出現する。グイ語でも年配者のデータには (生起数は少ないが) 観察できるので、両言語間にみられる相違は、participant marker からの歴史的な変遷を反映していると考えられる。今後グイ語の民話などの中での出現を確認する必要がある。

話者の認識を表すと考えられるのはどのような文脈においてか。

- ・ 日本語 (南紀方言) において「NP+ダ (相当語句) (下降イントネーション) 文末にある場合、話者の「判定」を表す。
- ・ グイ語においてはまだ確定できていない。

文を越えて外にある情報とのリンクを示すのはどのような文脈においてか。

- ・ 日本語 (南紀方言) においては「ノダ (およびその相当語句) が文末に用いられる場合においてである。
- ・ グイ語においては疑問文以外で「'a」が用いられる場合においてである。

## (2) 時制との関係

日本語・グイ語ともに文レベルにおける場合とテキストレベルにおける場合とでは時制の出現がことなり、テキストレベルにおいては「絶対時制」ではなく「相対時制」をしめすと考えることができるが、「時制転換」は、日本語ではしばしば観察できるが、グイ語では起こらない。一方で、日本語では、一般に「ムードのタ」と呼ばれる、テキストにおいて時制転換を許さない (「発見のタ」など) 現象がある。この問題を、日本語の「ダ」は、コンピュータではなく同定詞で、文末に用いられた場合は話者の認識・判定をあらわすと考えると、その「タ」形は、「認識に至った・認識を修正した」ことを表すと解釈できる。このような解釈と整合するような形式で「文の構造」の枠組みをどのように構築できるかは今後検討すべき課題である。

## (3) 情報構造

グイ語の「'a」の出現は、情報構造との関わりが大きい。語順が比較的自由的なグイ語にあって、dislocation は頻繁におきる。一方、焦点マーカーと考えられる「ki」も存在し、これらは共起可能である (焦点の位置は固定

されていない)。これらのテキストでの出現を分析することによって、以下のことが明らかになった。

- ・ dislocation は「ki」とは独立した現象であるが、「'a」とは関連がみられる。特に、「'a」は dislocate された要素を繰り返す際によく用いられる。
- ・ 文脈においてあらたに導入される情報に「ki」は付加しない。疑問詞疑問文に対する解答などの新しい情報にも付加しない。contrastive な用いられ方はしないが、exhaustive な用いられた方はする。このように、「ki」は、たとえば一般的に information focus/identificational focus で二分されるような焦点に関わる現象のいずれかを過不足なく有しているわけではないことがわかった。「ki」は近縁の言語にもみられないグイ語に特徴的な要素であり、「'a」の機能拡張・変化とあわせて今後歴史的な研究へと発展させたい。

## (4) ツェラ語調査

ツェラ語の現地調査をおこない、基本的文法項目の調査と談話資料の収集を実施した。それを分析し、上記の(4)でみたように、「'a」の出現にグイ語のそれと相違点があることを明らかにした。これを検証するためには今後より年代の高いツェラ語話者の体系および言語運用の調査が必要である。

## (5) 今後の課題

文末の同定詞の機能に「判定」という概念を導入した場合、それと整合するような形式での「文の構造」の枠組みをどのように構築するかが最も大きな課題である。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 5 件)

大野仁美「南紀方言における「ノダ」相当形式と「タ」の共起」『言語と文明』14: 85-90、麗澤大学大学院、2015、査読無。

大野仁美「グイ語の時制・アスペクト体系」『日本語学』5月号、2015、査読無。

大野仁美「南紀方言における「ノダ」相当形式と終助詞」『言語と文明』13: 123-134、麗澤大学大学院、2014、査読無。

大野仁美「コエ語の時制体系」『麗澤大学紀要』98: 15-20、2015、査読有。

大野仁美「「NP ダ」をめぐって」『言語と文明』12: 53-59、麗澤大学大学院。  
2014、査読無。

〔学会発表〕(計 3 件)

大野仁美「グイ語ナラティブにおける  
ダイクシスと情報構造」、シンポジウム  
「セントラル・カラハリ・サンにお  
けるコミュニケーションの自然誌」、  
京都大学、2015 (京都市)

ONO, HITOMI "Temporal and aspectual  
expressions in G|ui." WOCAL 8, Kyoto  
University, 2015 (京都市)

ONO, HITOMI "Temporal expressions in  
G|ui", 5th International Symposium  
on Khoisan Languages and  
Linguistics, Institute für  
Afrikanische Sprachwissenschaften,  
Goethe Universität, Frankfurt am  
Main, July, 2014  
(Riezlern/Kleinwalsertal, Austria)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

大野 仁美 (ONO HITOMI)  
麗澤大学・外国語学部・教授  
研究者番号: 70245273